

文学から見た農村

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者名	山下, 裕作
発行元	養賢堂
巻/号	83巻1号
掲載ページ	p. 111-120
発行年月	2008年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



文学から見た農村

— 詩人たちは農村に何を見てきたのか —

山下裕作*

【キーワード】：農村の詩、詩的眞実、理想郷としての村、現実の村、村の母性

しづまりかえった午さがりの林道を
(のちのおもひに)⁽²⁾

1. はじめに

山のあなた(彼方)の空遠く
「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。
噫(ああ)、われひとゝ尋(と)めゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸(さいはひ)」住むと人のいふ。
(山のあなた)⁽¹⁾

この詩を、とある農村のイベントで聞いたことがある。詩吟として謡われていた。この「山のあなた」は、日本近代詩の成立に多大な影響を与えた上田敏の訳詩集「海潮音」(明治38年)に紹介されたものであるが、その作者であるカール・ブッセ(1872.11.12~1918.12.4)は本国ドイツではまったく無名の詩人であったという。ブッセは山の彼方に何を見たのであろうか。また、詩吟という形でこの詩を謡った農村の生活者は、村から見た山の向こうに何を見たのだらう。より遠くの村か、それとも都会なのか。

立原道造(1914.7.30~1939.3.29)という詩人がいた。肺病を患っていたためであらう、東京大学の建築の学生でありながら、信州追分に住み詩作を行い、20歳代で早世した。戦前の詩人である。その立原が「山の彼方」にある「幸」に幻視したものは、明らかに「村」であった。

夢はいつもかへつて行つた 山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない

夢みたものは ひとつの幸福
ねがつたものは ひとつの愛
山なみのあちらにも しづかな村がある
明るい日曜日 青い空がある
(夢みたものは…)⁽³⁾

おそらく都会で生活していたのだらうブッセも、そして農村の生活者も、「山の彼方」に幻視していたものは立原と同じくユートピアとしての村だったのではないだろうか。

詩的眞実という言葉がある。自然科学的な客観的眞実とは別に、人間が五感で感じ取り、主観の中で整理する眞実である。人間として生きる限り、この眞実は重い意味を持つ。詩人が描き出す「村」は、現実の農村とは客観的には異なるであらう。しかし、人間として生きるうえで無視することができない「詩的眞実」にあつて、「村」はさまざまに美しく語られる。農村の多面的機能ということが盛んに言われているが、実は、村とは、そこにあるということだけで、さまざまに生きる人々の心の支えとなっているのかもしれない。そうした村の姿を、詩の中から探っていこうと思う。

2. 散りゆくことと、生き続けること — 宮沢賢治と高村光太郎 —

農業農村を描き続けた詩人として、まず取り上げなければならないのは、宮沢賢治(1896.8.27~1933.9.21)であらう。37才で病死した賢治にとって、生前公刊された詩集は『春と修羅』(大正12年)のみであった。その詩の多くが心象スケッチといわれる技法を用いており、文字面を追って理解しようとするとかかなり苦勞する。心の有り様をそのま

*独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所
(Yusaku Yamashita)

ま言葉にしたものであるため、むしろ、そのまま感じ取ればいいのかもしれない。文字面は難しいにしても、この詩人が込めたメッセージはきわめて明確であり、ストレートである。

「原体剣舞連」と言う詩の最後に、次のようなくだりがある。

夜風とどろきひのきはみだれ
月は射そそぐ銀の矢並
打つも果てるも火花のいのち
太刀の軋りの消えぬひま

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

太刀は稲妻萱穂のさやぎ
獅子の星座に散る火の雨の
消えてあとない天のがわら
打つも果てるもひとつのいのち

(原体剣舞連)⁽⁴⁾

簡単に言えば、どんなにあがいても短い命なのだから、一生懸命やろう、ということになる。賢治の人生そのものと重なる。賢治の意志・志の美しさというものが胸をうつ詩である。

賢治の詩の良さは、岩手に住まなければわからないところが確実にある。全国の多くの人に愛される要素を持つ一方、その詩の中には岩手の自然がとけ込んでいる。その賢治がユートピアとして構想したのが「イーハトーブ」であった。賢治は、その理想郷「イーハトーブ」を、実際の岩手の土の上に実現しようとしていたのだろう。賢治が父親に反発して信仰した法華宗も、あの世の浄土をあてにするのではなく、この世を浄土にしようという信仰である。

そのために、賢治は尽力した。「打つも果てるも火花のいのち」を尽くして頑張った。その具体的な様子は他の詩の中にも見ることができる。

もうはたらくな
レーキを投げろ
この半月の曇天と
今朝のはげしい雷雨のために
おれが肥料を設計し
責任のあるみんなの稲が
次から次へと倒れたのだ
稲が次々倒れたのだ

働くことの卑怯なときが
工場ばかりにあるのでない
ことにむちゃくちゃはたらいて
不安をまぎらかさうとする、
卑しいことだ

(もうはたらくな)⁽⁵⁾

賢治は、このようにがむしゃらに働いて、体を壊し、早世する。

賢治には「農民芸術概論綱要」という決起文のような詩があるが、これら一連の詩は、理想郷イーハトーブへの、あまりに切ない憧憬そのものである。この憧憬は賢治をして早死にさせた。これらの詩が持つ美しさは、言ってみれば「短命の美学」である。努力して、辛苦して、散っていった者の美しさ、であると思えてならない。

賢治の作品が評価されたのは死後のことと言われるが、賢治存命中に『春と修羅』を読み、感銘を受け、畏敬の念をもって望視していた詩人たちは多くいたという。

高村光太郎(1883.3.13~1956.4.12)もその一人であった。

人間国宝高村光雲の子息であり、彫刻・塑像などの芸術でも、詩人としても大変に高名な人物である。代表的な詩集の一つに『智恵子抄』(昭和16年)がある。精神を病んで亡くなった愛妻、長沼智恵子との生活を、死に至るまでつづった詩集である。日本近代詩の中で、愛するものを歌い続けて編まれた詩集は、この智恵子抄のみであるという。

その智恵子抄の始まりの詩はこのような詩である。

いやなんです
あなたのいつてしまふのが――

花よりさきに実のなるやうな
種子よりさきに芽の出るやうな
夏から春のすぐ来るやうな
そんな理屈に合はない不自然を
どうかしないでみて下さい
型のやうな旦那さまと
まるい字をかくそのあなたと
かう考へてさへなぜか私は泣かれます

小鳥のやうに臆病で
大風のやうにわがままな
あなたがお嫁にゆくなんで

いやなんです
あなたのいつてしまふのが――

(人に)⁽⁶⁾

次のような詩もある。

あなたは私のために生まれたのだ
私にはあなたがある
あなたがある あなたがある

(人類の泉)⁽⁷⁾

智恵子は光太郎にかようにまで想われていた。
これらの他にまた、智恵子の声が聞こえてくるよ
うな詩が多くある。

智恵子の故郷は、福島県の二本松市であった。そ
この造り酒屋の娘である。

その二本松市を見下ろし、阿武隈川の流に煌め
く日の光と、遠くの阿多多羅山を望む安達ヶ原の木
のしたで、智恵子が指で指し示しながら光太郎にそ
の地勢を教える。「樹下の二人」という詩である。

あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

(樹下の二人)⁽⁸⁾

木の下に寄り添う智恵子の、その息づかいまで聞
こえるような詩である。とても幸福であったのだろ
う。そして、智恵子は東京にあっても、ふるさとの
ことを度々思っていた。

智恵子は東京に空が無いといふ、
ほんとの空が見たいといふ。

...

智恵子は遠くを見ながら言ふ。
阿多多羅山の山の上に
毎日出てゐる青い空が
智恵子のほんとの空だといふ。

(あどけない話)⁽⁹⁾

そして、「山麓の二人」という詩がある。

――わたしもうぢき駄目になる
涙にぬれた手に山風が冷たく触れる
わたくしは黙つて妻の姿に見入る
意識の境から最後にふり返つて
わたくしに縋(すが)る
この妻をとりもどすすが今は世に無い
わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し
闕(げき)として二人をつつむこの天地と一つ
になつた。

(山麓の二人)⁽¹⁰⁾

磐梯山を望む山でのことであつた。智恵子は不治
の精神病を患っていたのである。

病に冒されつつあるとき、智恵子は一人残される
であろう光太郎を想い梅酒をつけた。

ひとりで早春の夜ふけの寒いとき、
これをあがつてくださいと、
おのれの死後に遺していった人を思ふ。
おのれのあたまの壊れる不安に脅かされ、
もうぢき駄目になると思ふ悲に
智恵子は身のまはりの始末をした。

(梅酒)⁽¹¹⁾

狂気は七年続いた。そして、終わりを迎える。

かういふ命の瀬戸ぎはに
智恵子はもとの智恵子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた
それからひと時
昔山巔でしたやうな深呼吸を一つして
あなたの機関はそれなり止まつた
写真の前に挿した桜の花かげに
すずしく光るレモンを今日も置かう

(レモン哀歌)⁽¹²⁾

昭和13年、智恵子53才。ふるさとを思い、光太
郎を想い、そして光太郎とともに過ごしたふるさと
の山での深呼吸を一つして、智恵子は亡くなった。
この後、光太郎は18年ほど余計に生きる。
東京の自宅が空襲で焼かれ、昭和20年には賢治

の実家に疎開したが、そこも空襲により焼失し、花巻郊外の山小屋で生活するようになる。

その折、光太郎には日課があったという。毎朝、雪が積もっていようが、嵐だろうが、小屋に近い山の頂に登り、呼びかけるように叫んでいたそうである。「ちえこー、ちえこー」と大声で呼んでいたそうである。

智恵子抄以後の詩集を見ればわかるだろう。光太郎は、その後の一生を、智恵子を想いながら暮らし続けた。そして、昭和31年に亡くなる。74才であった。

光太郎は賢治を生前に評価した数少ない人物の一人である。しかし、筆者はこの二人の詩人にまったく異なるものを感じている。

農業というものは、実際には弱いものではなかるうか。「雨ニモ負ケル 風ニモ負ケル 雪ニモ 夏ノ暑サニモ負ケル」のが農業であろう。しかし、われわれは生き続けなければならない。弱かろうが何だろうが、すべての人間は、農業にすがって生き続けなければならないのである。

光太郎は生き続けた。最愛の妻とつらい別れをし、信じていた日本が戦争に負け、自分が作った戦争賛美の詩を読み、誰かの父や息子が何人も何人も戦地に赴き死んでいったとしても、光太郎は必死に智恵子を呼び続けながら生き続けた。

筆者は、現在でも賢治を深く尊敬している。しかし、理想を求めて、身勝手な無理をして「火花のいのち」を散らすよりも、弱く悩みながら生き続けた光太郎の方がよほど農業的であるように思えてならないのである。

3. 村にいる母－丸山薫と田中冬二－

ここでは丸山薫(1899.6.8~1974.10.21)と田中冬二(1894.10.13~1980.4.9)という二人の詩人が描いた村について紹介する。

丸山薫と先の立原道造はともに四季派というグループに属する兄弟分のような関係であった。田中冬二については、いささか曖昧であるが、一定の関係はあったらしい。しかし、そもそもの詩風が冬二の場合、四季派とは少し異なるように想われる。

一方、薫には道造と似たような詩がある。

汽車に乗って

あいるらんのやうな田舎へ行かう
ひとびとが祭の日傘をくるくるまはし
日が照りながら雨のふる

あいるらんのやうな田舎へ行かう

(汽車に乗って)⁽¹³⁾

一体どんな列車に、どれだけ乗ればアイルランドのような田舎に行けるのだろうか。

立原道造の夢が帰る「村」も、明るい日曜日青い空の下の「村」も、ブッセのいう「山のあなた」の「幸」も、そして、この「あいるらんのやうな田舎」も、詩人達の理想の中にある「村」である。宮沢賢治が理想とし、その実現のため命を削ったイーハトーブも、実はこうした詩人が理想とする村の系譜にある。激しい実践を促した理想郷である。

丸山薫はこの「汽車に乗って」近辺の時期、いかなる詩を書いていたのであろうか。伊藤整という著名な詩人、評論家に、「私より上手い詩人を初めて見た」と言わしめた詩がある。その詩には「病める庭園」という題がつけられている。

静かな昼下がりの家で、父親、薫の父は高級官僚だったが、その風船玉のように太った父親が籐椅子にくつろいでいて、少し老けた母親がその傍らで毛糸を編んでいる。そんな裕福な家庭の一場面を想起いただきたい。そこに泣き濡れたような鳥の声が響いている。

それはこんな声である。

オトウサンナンカキリコロセ
オカアサンナンカキリコロセ
ミンナキリコロセ

(病める庭園)⁽¹⁴⁾

なにか怖ろしい詩ではないだろうか。薫の初期の詩には、こうした虚無の陰りがあると言われている。船乗りになろうとして商船大学校に入ろうとしたが、健康上の理由であきらめざるをえなかった、という挫折の経験もあった。

この丸山薫をなぜ取り上げるのか。単に好きだから、ということではない。この詩人の後年の作品に、これまでの理想郷としての村とは違う、リアルな農村。それもリアルでありながら美しい農村が登場す

るからである。

それは『北国』、それから『仙境』という昭和21・23年の詩集である。

薫は昭和20年5月、一家で山形県の岩根沢というところに疎開する。そこで三年間小学校の先生を務めるのであるが、その岩根沢という農村での暮らしや、そこに住む子供たちや村人との交流が、薫の詩風を大きく変えたのである。

「白い自由画」という詩がある。

「春」という題で、薫は子供たちに絵を描かせようとする。

しかし、子供たちは困ってしまう。まだ早春。見渡す限りの雪。真っ白い山の重なり、真っ白に起伏する野や畑、そこに屹立する葉のない疎林ばかりである。しかし、空の色は、真冬のころとは違う明るみをもっていた。薫は子供の絵の空を、黄色をまじえたコバルトブルーに塗り上げていく。

そして、誤って、

まだ濡れてゐる枝間に
ぼとり！と黄色を滲ませる

私はすぐに後悔するが
子供達は却つてよろこぶのだ
「あゝ まんさくの花が咲いた」と
子供達はよろこぶのだ

(白い自由画) (15)

「まんさくの花」は、春になると「まずさく」花である。木の枝に「淡黄色の粒々とした眼にも見分けがたい花だけれど」。そのまんさくの花を、子供たちが手折って持つてくる。

まんさくの花が咲いたと
子供たちが手折って持つてくる
まんさくの花は点々と滴りに似た
花としもない花だけれど

山の風が鳴る疎林の奥から
寒々とした日暮れの雪をふんで
まんさくの花が咲いたと
子供たちが手折って持つてくる

(まんさくの花) (16)

そして、夏がきて秋がくれば、山の木は沢山の葉をつける。その木漏れ日の中を薫は歩く。すると薫が教える女の子達が、「どこか見えない草や木の隙間から」、じっと薫の通るのを伺っている。そして、「ぼうと不意に山鳩の啼き真似をして 啞々とひとこゑ鴉のように」薫を呼ぶのである。薫は駆け戻って探すのだが、とたんに少女達は身を潜め、ひっそりと「水のせせらぎや 風のそよぎに」なってしまう。

ああ 不思議な山の少女達の戯れよ
私は都を遠く いま 八重なす山の国に住んで
私の人生は寂しくとも
所在なき秋の日の午後 森の下径を歩けば
これら 幻に肖た鳥達のこゑに囲まれるのだ
(鳥達) (17)

薫はこの岩根沢という実在の農村に来て、慰められたに違いない。

ここにあるときの詩風は、実に優しい。

昼のあとに
夜がくるやうに
日の暦の去つた日本の田舎を
月の暦がめぐつてくる

陰暦「後の正月」は
寂寥とつもつた二月の雪のさ中に
この山上の村をも訪れる

家々はそがきの中に
固く戸を閉してゐるが
子供達は山から瑞木を手折つてきて
枝先に団子を挿し 折鶴を吊して
それを炉のいぶる長押に飾る
枝々は細く朱く 団子の珠は白く
色紙の鶴は炎に映えて
なんと夢のやうに懐かしいのだらう

(陰暦) (18)

この岩根沢での疎開中に、薫は母親を亡くす。「病める庭園」という詩の中で「カアサンナンテキリコ

ロセ」と言われていた母親である。

しかし、この農村での暮らしの中で、薫は優しく悲しく母を悼んでいる。

次の詩は母親が亡くなって二十日の後、雨の中、母の形見となった黒い傘をさして、学校へ向かう時の情景である。

お手製のふくろにしまはれた
少女のパラソルのやうに
柄の短いコウモリ傘！

それを翳せば
雨も私の頭と肩にはふらず
私はあなたと一緒にゐるやうです

そのうへ 未だ私が子供で
あなたが若かつたむかしから
媪となって ひつそりと暮らされるまで
始終 私達の気持に投げかけてみた
あの柔かな慈愛の蔭にかくれるやうで
私の胸はせつなく温まり
甘い思ひ出にうるむのです

(母の傘)⁽¹⁹⁾

子供は親を許すために生まれくる、という。薫の母を思う気持ちに、もう以前のような猛々しく泣き濡れた感情はないであろう。やはりこの岩根沢という農村での生活が、彼の観念に優しい働きかけをしたのではないだろうか。

薫は『北国』という詩集の中に、理想というものについて謳っている。

夜空に星が煌めくやうに
真昼の空にも星があると
さうおもふ想念ほど
奇異に美しいものはない

私は山に住んで なぜか度々
そのかんがへに囚はれる

(美しい想念)⁽²⁰⁾

星の煌めく夜空が「理想の世界」、真昼の空は「現実の世界」とされている。この北国の農村での生活

の中で、薫は「真昼の空にも星がある」と思うようになるのである。すなわち、理想は現実の中にこそあるとするのである。もはや薫の観念に「あいるらんのやうな田舎」という幻想の村という理想はない。

薫は『仙境』という詩集のあとがきで次のように記している。

「『仙境』とは、私の住む現実——正確に言えば山形県西村山郡西山村岩根沢の、月山につづく山腹と谿間に散らばる一帯の山人の世界——そこから立ち昇る雲烟である。私のからだはここに住み、こころはけむりの中に住んでいた。私が詩を書いているのを評して、都会のある若い詩人が『彼はもう分教場の窓から淡雪でも眺めている方がいいだろう』と言った。はて、淡雪というものはいったい何処の国で降つたろう？ここは元来、糊でつぎ貼りしたような人間にはくらせない荒々しい自然の中である。雪は三メートルも積り、しかも人が決してその中を歩けないようにしか吹雪かないのだ。」⁽²¹⁾

こうした厳しい村での生活を経た後の詩風は、次のように評されている。

「薫はこの豪雪地帯の風土と人生から、健康で明るい詩情を獲得し、彼の詩の領域を拡大した」⁽²²⁾

農村の現実には明るいものばかりでは決してない。農村の持つ暗い側面から賢治の理想郷であるイーハトーブは生まれたのかもしれない。しかし、もう一方の現実を、決して忘れてはならないのではないか。この丸山薫の心を変えたように、農村の暮らしには美しい真実も多分にあるのである。「真昼の空にも星がある」のである。理想は現実の中にこそある。

戦後まもなくの混乱期、ある大きな本屋さんが混乱の中にある国民に、今、誰の詩が読みたいか、ということ聞いてまわった、という話を讀んだことがある。何の本かは忘れてしまった。

その時、最も読みたい詩人として選ばれたのが田中冬二という詩人であったという。丸山薫と同世代

の詩人で、昭和55年85才まで生きた。高村光太郎が昭和31年没、74才。丸山薫は昭和49年没、75才だから、だんだん長生きになっている。

この詩人の詩風は、何といても平明な表現。丸山薫によれば「具体的な素材で日本の田舎と季節と旅とを知的に静かに叙情している」と表現される。たとえばこんな詩がある。

炎天を
麦打ちしてゐる村
娘たちよ
夜になつたら町へ氷水をたべにゆかう
(村)⁽²³⁾

うだるような暑い日、麦打ちというのは麦の脱穀作業である。メグイボウで叩くか、ムギウチダイに麦の束を叩きつける。汗みずくになるうえ、麦の野毛が体中にチクチクと突き刺さる。むせかえる麦わらの匂い、そんな中で登場する氷水、その冷たい感触がひととき感じられる平明な詩である。

次の詩はよくご存じであろう。

いつばいの星だ
くらい夜みちは
星雲の中へでもはひりさうだ
とほい村は
青いあられ酒を あびてゐる

ぼむ ぼむ ぼむ

町で修繕した時計を
風呂敷包に背負つた少年がゆく

ぼむ ぼむ ぼむ ぼむ……

少年は生き物をせおつてるやうにさびしい
(青い夜道)⁽²⁴⁾

星空の下の夜道を行くお使い帰りの少年に対する暖かな眼差しがこの詩にはある。やさしい詩である。

この田中冬二は銀行員を本職としていた。銀行員としてあちこち全国を転勤し、そこで触れる村々に深い愛着をもって、詩を書いた。

しかし、生い立ちはあまり恵まれたものとは言えない。

父親とは七才のころ、母親とは十二才のころ死別した。その後親戚(富山に『たなかや』という旅館を現在でも続けておられる)に引き取られ、中学卒業後、また親戚である銀行家(安田善治郎)の銀行に勤めることとなったのである。

幼くして死に別れた父、母についての詩が残っている。

父はいつも勤めから帰るごとに三つになる子
にたずねた
――今日は泣かなかったか
――お昼には何を食べたか と
(家)⁽²⁵⁾

目を醒ますと木枯は未だ荒れていた
母は夜並(よなべ)の仕立物をつづけていた
――お母さん と呼び母の応えるのをきくと
私は二度やすらかな眠りに入った
(母 木枯の記憶)⁽²⁶⁾

「父母」と題された詩もある。

何というよい名前だろう
これ以上の親しい呼び名が他にあるだろうか
父という字 母という字にも心温まるものがある
父の眉宇 母の眼差しが思われる
だが私にはさびしい
幼にして父を喪い ついで母に逝かれた私にはとてもさびしい
(父母)⁽²⁷⁾

寂しさの中、冬二は農村に暖かみを見いだしていく。

つめたい秋から冬を
紙袋の中でかさかさとして
すごして来た種子よ

八十八夜が来て
君らが野良へ下りると
もう暗い夜道の一人あるきも
寂しいことはなく
何となくにぎやかで
君らのはなしごゑでもきこえさうだ
そして君らは
やはらかい青い夜ぞらから
甘い酒でもよびさうだ

(八十八夜)⁽²⁸⁾

さむい月夜を村の家々は
木綿の夢にねてゐる
どの家でも簀の上や目簀に
豆腐をしろく夜干してゐる

ほしぐさやたきぎをつんだ底の下
月がふかくさしこんで その家の何十年もの
老いたる忠実なる用具
――臼や杵 はしごと
むかしがたりをしんみりしてゐる

凍つた庭にはくろくはつきりと大屋根のかげ
祖先のかげである

...

なにもかも寒い冬の夜の村に
あたたかいものといつては
家にこもつてゐる みかんのほひのやうな
人情ばかりである

(凍豆腐を夜干しする冬の村)⁽²⁹⁾

野良の作物たち、そして蜜柑の匂いのするような
人情、そうした農村の暖かみを感じ地方から地方へ
の寂しい道行きを励ましたのであろう。

そしてその暖かみのある実在の農村に、冬二は亡
くなった母の姿を見るのである。

麦は黄ばみかけてゐる
トマトの小さな風車のやうな花が咲き 蛙が
ないてゐる

蛙がないてゐる
山椒の葉がひかり うどの葉がひかり
薄月夜

どこかに追憶の母がたつてゐるやうである
(追憶の母)⁽³⁰⁾

冬二の詩の描写は、誠に具体的である。焼畑・イ
ノシシ畷・行商・山葵田・蒟蒻・田舎の床屋・田圃・
蛙・雑木林・麦・焼畑の豆…。その詩は、高名な民
俗学者であり歌詠みでもあった牛尾三千夫の『美し
い村 民俗探訪記』に通じるものが感じられる。冬
二や牛尾の叙述には、あるがままの農村に対する平
明で素直な愛情があるのだろう。そうした冬二のわ
かりやすく優しい愛情に、農村も応えたのではない
か。そうした実在の農村との交流こそが、冬二の詩
であるように想えてならない。

詩集『菽麦集』(昭和19年)に冬二はこんなこ
とを書いている。

「詩を書いて二十有余年。私は田舎道をひとり
淡々と歩いてきた。麦打ちをしている村を郭公が
なき、椎茸をつくっている山間の村を。煙草の干
し葉に天候を気づかい夜半も目ざめているよう
な村を。私は豆の花を信じた。やがて好い実を結
ぶあの小さい質素な豆の花を。私は小暗いランプ
を信じた。夜半は芯を細めにするランプを。そし
て親しい彼等がこうして私に詩を書かせて来た
のである。」⁽³¹⁾

丸山薫は、農村での生活の経験から、農村の現実
の中に理想の煌めきを見いだした。

田中冬二は、ありのままの農村を平明に愛し、素
直に親しんだ。そして荒廃した戦後の人々に生きる
力を与えるような詩を「書かせて」もらったのであ
る。

4. おわりに

私ども現代人が、農業農村の問題に当たる際、あ
まり大仰にそして小難しく考えないほうがよいの
ではないか、というのが私の持論である。

賢治の「農民芸術概論綱要」は、あまりに壮大で、
あまりに大変である。賢治の清明な志の現れとも言

えようが、これでは早死にしてしまう。

われわれは生きながらえねばならない。農業はそのためにこそある。それがゆえに何より大切なものなのである。

賢治がもっと長生きすれば、その「農民芸術論」はより薰り高く、そして親しまれやすく醸成されたであろう。しかし、早世してしまった。その損失は後世のわれわれにとって、大きな大きな損失だったように思えてならない。

農業・農村における芸術性とは、自ずからそこにあるものと思う。住む人、訪れる人が覚える素直な感動こそが、農村の見えない価値なのである。それはまた住む人の暮らしから、自然と育まれる。

民俗学者の篠原徹は、その著『自然を生きる技術』において次のように記している。

「地域の生活者の自然に対する態度は、およそ自然詠や叙情とはかけ離れたものである。それゆえにこそ、できる限り彼らの自然に向き合うときの技術や自然知を詠や叙情とは異なる方法で表現してきた。…しかし、彼らの生活者としての「生きる方法」は、詠や叙情をいくら排除したり、拒絶したりしても、それを排除できなく迫ってくるものがある…。」⁽³²⁾

私どもは、農村に暮らし、あるいは農村を歩き、皆々で語り合い、それにより自ずから胸に「迫るもの」を感じ取るべきなのである。そして自らの胸(心)の声を素直に聞き取ってみなければならない。それすらできないのであれば、本当の農村の価値というものはわからないのではないか。「農業・農村の多面的機能」というものは、所詮は理屈である。自然科学的理解を模倣した説得のための論理でしかない。

宮沢賢治について、あまり良く書いてはこなかった。しかし、賢治は偉大である。

私ども現代人は、こと農業・農村に関わる限り、賢治の後輩である。

先輩の薫陶をうけるという意味で、賢治の教えてくれることに耳を傾けようと思う。

しっかりやるんだよ

これからの本当の勉強はねえ
テニスをしながら商売の先生から
義理で教はることでないんだ

きみのやうにさ

吹雪や僅かな仕事のひまで

泣きながら

からだに刻んで行く勉強が

まもなくぐんぐん強い芽を噴いて

どこまでのびるかわからない

それがこれからのあたらしい学問のはじまり
なんだ

ではさやうなら

…雲からも風からも

透明な力が

そのこどもに

うつれ…

(あすこの田はねえ)⁽³³⁾

引用文献

- (1) 上田敏 訳 1952(1996). 海潮音. 新潮社, 東京. 73.
- (2) 丸山薫・田中冬二・立原道造・田中克己・蔵原伸二郎 1968(1988). 日本の詩歌 24 丸山薫・田中冬二・立原道造・田中克己・蔵原伸二郎. 中央公論社, 東京. 182-183.
- (3) 前掲(2). 218-219.
- (4) 天沢退二郎 編 1991(2005). 新編 宮沢賢治詩集. 新潮社, 東京. 69-73.
- (5) 前掲(4). 249-251.
- (6) 高村光太郎 1974(1996). 日本の詩歌 10 高村光太郎. 中央公論社, 東京. 268-269.
- (7) 前掲(6). 292.
- (8) 前掲(6). 303.
- (9) 前掲(6). 309-310.
- (10) 前掲(6). 317.
- (11) 前掲(6). 321.
- (12) 前掲(6). 318.
- (13) 前掲(2). 27.
- (14) 前掲(2). 24.
- (15) 前掲(2). 59.
- (16) 丸山薫 1989(2000). 現代詩文庫 1036 丸山薫. 思潮社, 東京. 69.
- (17) 前掲(16). 72.
- (18) 前掲(16). 73-74.
- (19) 前掲(2). 64-65.
- (20) 前掲(2). 61-62.
- (21) 前掲(2). 63.
- (22) 前掲(2). 64.
- (23) 前掲(2). 95-96.
- (24) 前掲(2). 96-97.
- (25) 丸山薫・三好達治・田中冬二. 美しい日本の詩歌 16 詞華集 少年. 岩崎書店, 東京. 89
- (26) 前掲(25). 91.
- (27) 前掲(25). 92.
- (28) 前掲(2). 101.
- (29) 前掲(2). 106-109.

(30)前掲(2). 142.

川弘文館, 東京. 206-207.

(31)前掲(2). 156-157.

(33)前掲(4). 240-241.

(32)篠原徹 2005. 自然を生きる技術 暮らしの民俗自然誌. 吉
